

### \*\*\* 技術と芸術

川を題材にした音楽は古今東西、和洋を問わず多い。なかでも連作交響詩「わが祖国」のなかの一曲「モルダウ」はその叙情的な旋律とともに、長い間多くのファンを魅了し続けている。

その作曲者であり、不朽の大作曲家といわれるB.スメタナ(1824~84)が、1857年、ワイマールにF.リスト(1811~86)を訪ねたときのこと。スメタナは、ちょうどそこ居合わせたウィーンのある音楽家に「君の国チェコには音楽の職人はいるが芸術家はいない。」と言われた。ウィーンの音楽家が言った“辛口”の言葉には、職人とは技術の実践者のこと、そして、芸術とは愛国心に直結するものであることとの意味が込められている、と感ずる。その一言に、スメタナは大いに憤慨し、チェコ民族の音楽家になろうと固く決心したという。以後、かれは多くの苦難を乗り越えて、その決心を「わが祖国」などに結実させたばかりか、「新世界から」(交響曲第9番ホ短調)などで知られる後輩 A.L.ドボルザーク(1841~1904)を育てた。

ところで、教育の荒廃が言われて久しい。

教育技術に熱心な“先生屋”が目立つ昨今、真理の探究のために全力投球している教育者はどこへ行ってしまったのだろうか。技術の職人は日々たくさん目にするが、真の日本の文化、地域の風土に根差した科学技術の実践に日々研鑽を重ねている技術者はどうだろうか。そして、そうした地道な実践を続ける“本物”に、社会はどれほどの光を当てているだろうか。

私たちが技術実践の対象としている社会資本は、本来それぞれの場所毎に違う、ひとつとして同じものがない、いわゆる“一点もの”である。このことは、現地で調査、計画、設計、施工、管理などに携わっている者であれば常々経験していることである。とりわけ、今、受注・発注両者が苦悩(?)する“技術提案”の原点は、言葉や表現力の問題ではなく、まさに現地そこにあるのではないか。思えば、統一基準を決め、機械化、マニュアル化、プレハブ化などによって、品質、効率、安全の水準は格段に向上したが、一方で、画一化によって個性、地域性を犠牲にしてきた面は否定できない。いま一度、その場所の自然的条件や地域の文化、風土に思いをめぐらせることが、技術の本質に求められている。

今年は「石狩川治水 100 年」を迎えている。100年前の 1910(明治 43) 年を初年度とする北海道拓殖事業計画(のちの北海道第一期拓殖計画)を樹立し、その実施を担う石狩川治水事務所(後の石狩川開発建設部、現札幌開発建設部)が設置され、北海道が“開拓”(未開地を拓き、人口を増やすこと)から本格的な“拓殖”(開拓とそのための基盤整備、拓地殖民)へと進展して以来、戦後、“開発”(資源の総合的な開発に重点)へと政策が移行し、世界的に見ても驚異的な速さで今日の発展の基礎が築かれてきた。この間、広大な未開の大地、積雪寒冷な気候、泥炭性軟弱地盤や火山性地盤など特異な条件下にあって、枚挙に暇がないほどの技術が独自に考案、適用されてきたこと

に支えられていることを忘れてはならない。

11月18日には札幌の“キタラ”で記念のコンサートが行われた。“技術と芸術”の進路、2世紀目の石狩川に思いを馳せながら、川に因んだ名曲の数々を、満場の聴衆とともに堪能させていただいた。

20101213 MS生

当日プログラムの最後を飾った交響詩「北の大地の交響楽・石狩川」は、石狩川治水80年にあたる1990年、石狩川とその流域が舞台となっている記録映画のBGMとして東京芸術大学・佐藤眞教授が作曲したもので、同年6月17日、記念式典(於札幌厚生年金会館(当時))において、小松一彦氏指揮、札幌交響楽団、アカデミー合唱団により初演された。

交響詩は、当時策定された「石狩川河川環境管理計画」の基本理念を踏襲し、第1楽章「自然」、第2楽章「文化」、第3楽章「人」、第4楽章「未来」から構成されており、作曲者の指名により阿久悠氏が作詞した合唱曲「子供たちよ」が最終章で高らかに歌い上げられている。



交響詩「北の大地」初演(1990年6月17日)